

てんぐさお峯

草民記(一)



水上 勉

中央公論社

ぐさお峯

草民記(一)

水上 勉



価八八〇円

てんぐさお峯 草民記(一)

昭和五十四年三月二十五日印刷
昭和五十四年四月五日発行

著者 水上 勉

発行者 高梨 茂

印刷所 精興社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ八ノ七

電話(五六一)五九二一

振替東京二一三四

検印廃止

©一九七九

てんぐさお峯 草民記(一) 目次

とりとり彦吉

鯉とり文左

穴掘り又助

てんぐさお峯

稗田のおすえ

美濃のお民

祇園のくるみ

あとがき

5

27

45

73

97

131

169

204

装幀
関野準一郎

てんぐさお峯

草民記
(一)

とりとり彦吉

一

『丹後若狭草民宝鑑』という本に、「とりとり彦吉」の話が出てくる。とりとりは「鳥獲り」という意であって、つまり鳥獲り名人彦吉ということになる。しかし、彦吉は、鳥ばかりでなく、兎も、鼯も、むささびも、生け捕るに尋常以上の奇才があった様子なので、「とりとり」は「獲り捕り」とでも書いた方が当たっていたかもしれない。概して、『丹後若狭草民宝鑑』に出てくる奇人名人に冠せられるよび名は、独自である。「鯉獲り文左」「楓づくり善七」「穴掘り又助」「はきものおかね」「てんぐさおみね」などといったのが出てきて、はなはだ興趣ふかいのだが、たとえば、「穴掘り又助」といっても、よび名だけではどこに穴を掘ったかわからない。じつは、死者が出た場合、土葬の穴掘り人夫をつとめた人物のことである。「てんぐさおみね」は、海にもぐって、わかめ、てんぐさ、こんぶを取るに男まさりの才智があった寡婦の話である。『宝鑑』の筆者は、明治、大正、昭和にわたって、丹後、若狭地方の寒孤村を足まめに歩き、古老から聞いた話や、実際に見た話を、「人物誌」として書きとめている。独自の名称や形容句が出てくる

一方で、わかりにくい訛りがでてくるのも、山間支谷の「ことば」である所以だろう。余談はさておき、今回は彦吉の話をするわけだが、彦吉の生きた明治から大正にかけての時代に、この国には、「智識人」といわれる人と、「無智人」といわれる人とのふた通りあったらしく、それらは貧富の事情によって区分けされていたことを物語る福沢諭吉のことばを紹介しておく必要がある。「人は生れながらにして貴賤貧富の別なし唯学問を勤て物事をよく知る者は貴人となり富人となり無学なる者は貧人となり下人となるなり」(『学問のすゝめ』明治五年)

「今日日本にて貴賤上下の差別あるやうなれども其実は政府の命にて四民の別を立て人種を分ちたることなし(中略)貧人も富人も政府の命に由て貧富たるに非ず役人の門も金持の門も開放して誰にも其仲間に入入り更に差支あることなし(中略)貧富は順番面白き世の中にあらずや石室に住居して馬車に乗りたくば智恵分別を出して銭を取る可し富貴の門に門はなきものぞ門もなき其門へ這入ることを得ざる者は必ず手前に無学文盲と云ふ門ありて自ら貧乏の門を鎖し自分の勝手にて娑婆の地獄に安んずるなり若しもこの地獄を地獄と思はゞ一日も早く無学文盲の門を破る可きものなり」(『農に告るの文』明治七年)

「自由発達の極は貧富の不平均を生じて之を制するの手段なく貧者はますます貧に陥り富者ははいよく富を積み名こそ都て自由の民なれ其実は政治専制時代の治者と被治者との関係に異ならず」(『富豪の要用』明治二十五年)

「教育なき者が貧に居ることは固に当然なりと雖も其教育は為さざるに非ず能はざるなり(中略)」

經濟論者の言に無智即ち貧乏の原因なりと云はゞ貧者は之に答へて貧乏即ち無智の原因なりと云はんのみ」(『貧富論』明治十七年)

「最も恐る可きは貧にして智ある者なり(中略)貧智者は他に鬱憤^{うつふん}を漏らすの道なく是に於て世の中の総ての仕組を以て不公不平のものと為し頻りに之に向て攻撃を試み或は財産私有の法廃す可しと云ひ或は田地田畑を以て共有公地と為す可しと云ひ其他被傭賃の値上げ労働時間の減縮等悉皆彼等の工風に出でざるはなし彼の職人の同盟罷工なり社会党なり又虚無党なり其原因する所明に知る可し(中略)唯智慧あるが故に苦痛の苦痛たるを知りて自から満足するを得ず甚だ不平の鬱積遂に破裂して社会党と為りたるものなり貧人に教育を与ふるの利害思はざる可らざるなり」(『貧富智愚の説』明治二十二年)

批判はさておき、「万民に學問をすすめる説」ともいえた『學問のすゝめ』の筆者は、明治二十二年になって、漸次氣がかわって、無産者は無智のままにしておく方が、国策上の得策であつて、富者の子弟にだけ教育權を与えた方がよい、といっているようにもみうけられる。先覚者も変つた。世の中に「不変」は無い証^{あか}しだらう。

二

彦吉は寺子屋へ行かされた。行かされたといふのは、彦吉の述懐だが、つまり、福沢の『學問のすゝめ』によって、貧富の差なく平等に學問をする機會がやってきたので、彦吉の在所

の「大飯郡岡田部落」にも、菩提寺の西安寺に「寺子屋」が設けられた。父親の彦左衛門は、彦吉に「学問しにゆけ」とすすめた。ところが彦吉は、十日ほど行っただけでその学問がいやになった。どうも身にそぐわない。当人は「学問するには、出来のわるい頭にござりました」と『宝鑑』の筆者に述懐している。

「なぜに学問がいやでありましたかといいますと、西安寺の和尚が氣に喰わなかったのでござります。わしが寺へ行きますと、まぎ（軒下）に待ち伏せておって、とりとり小僧がきよった、あの罰あたりめが、と申したのでござります。いったい村のもんがわしをとりとりとよぶようになりしたのは、鎮海和尚がはじめにそういうたのはじまりで、わしのよび名となり、子供も大人もわしの顔を見ると、とりとり小僧といい、父親までが左様に、わしのことをよぶのでござりました。なるほど、鳥も生あるものなればと説教節にも申すのでござります。生ある鳥をむざんにもほかぐして暮すわしになりわいは、殺生をにくむ和尚どのの宗旨にそむくのでござりましたろう。しかしながら、わしは、和尚からいくら罰あたりめがといわれましても、とりとりはやめるわけにゆきませなんだ。父親とわしが鳥をとって町の仲買人に売ってこそ、病氣のおつ母とめくらのお婆の四人がくらしてゆけるのでござりましたから、和尚のいうことは氣にはなりませんが、きくわけにはゆきませなんだ。ついでに申しまするが、父親も学問はあまりありませんだが、鳥が死ぬるのを見るときは、念仏申せと申しました。それでわしは、鳥の首しめて、羽むしるときは、なむあみだぶつと申しました。申すだけで何やら、鳥に申しわけのないことをしてお

る氣持がやわらぐのは不思議でござりました。寺子屋で鎮海和尚は、『大学』と『論語』を教えました。十日でやめて、日がな鳥とりしてしますと、村の子らが、わしのことを和尚に申すのみえて、和尚は、わしが家へきて、寺子屋へくるよう説きましたけれど、その時、和尚は、父親が炉端で焼いてすすめましたる鵜のてりやきをうまそうに喰い、念仏も申しませなんだ。左様で、これでよろしいのでござりましょう。どこの世に、わが胃ぶくろへとけてゆきまする生あるものへ、念仏となえる人間がござりましょう。人であれば、生あるものを殺し喰いたさねば生を得ぬことわりは、坊さまも在家もおなじこと、このことわりは、鳥をとる日がなわしが考えておりましたることにござりまして、和尚さまから教えられた学問ではござりませなんだ。左様、つまり、寺子屋はわしにはいつも無縁でござりました」

こんなふうに彦吉は、『宝鑑』の筆者に語る。つまり彦吉は、殺生を戒める和尚が、鳥を喰い魚を喰い肉を喰いして、自ら殺生せねば生きてゆけない矛盾を、どう噛みしめているだろうか、と疑問を投げ、わしだけは殺生していないという和尚に反撥をおぼえ、寺子屋で学問することを厭うたけはいである。彦吉は、それで学問せず、とりとりにあけくらす。とりとりは、彦吉一家のくらしをささえている。その事情を説明する。

三

「わしは貧乏でござりましたゆえ、鉄砲は買えませなんだ。鉄砲は、鉄砲代もさることながら、

鑑札代もたこうて、岡田の部落で鉄砲もつのは、金持の兵助の兄ィ、善左の兄ィ、二人でござりまして、またこの兄ィらは、猪、兎、山鳥など大物をねらいします。わしらは、鉄砲もちませぬゆえ、くぐつ、はごにて、もっぱら鶇、鳩、きじ、豆まわし、ひよどり、虎鶇、小鳥のたぐいをとりましてござります。くぐつは山にしかけ、はごは田にしかけましてござります」

くぐつには二種類あって、山の雑木林で生木をつかうのと、藁で編んだ尺余の小舎にしかけたものがある。彦吉はこの両方をつかったらしいが、どんなものか説明するのに、図解でもしないと、わかりにくいいい方をしているので、いま、それをなるべくわかりやすいように説明してみる。

雑木林へゆくと、よくしなう木と、すぐ折れてしまう木の二種がある。彦吉は、しなう木を物色する。南天、ねじりなど、朱い実のなる木がよくしなう。人の背丈ぐらいのねじりは、だいたい大人の拇指ぐらいの太さである。この木の先端に麻縄をしばりつけ、縄の先端を、別の木にさしわたした二本の枝へくぐらせて、ねじりをしなわせておく。枝のわきに、稲穂だの、朱い実をのせておくと、鳥がやってきてとまる。鳥はその重量で、麻縄の端に結んだもう一本の枝のとめ棒をはずす。瞬時のうちに、結んだある枝が落ちてきて、鳥の胴体と首をはさんでしまうしかけである。こう書いても、さっぱりわからぬかもしれぬ。しかし、こうとしか書きようのないしかけである。彦吉は、一日じゅう雪の山を歩いて、雑木の林へもぐり、実のなる木の多いところへ、このくぐつをだいたい二十点ほどしかけて帰る。

もう一つのくぐつは、よくしなう木または生竹を生木のかわりに使って、いってみれば、山のくぐつを鼠とり式につくり、藁をかぶせて、雪のふかい山根^{やまね}、田のあぜ、ごろく（稻かけの木の小舎）のまぎなどにしかけておくものである。これはもち歩けるので、好きな箇所にはこべた。

ざっと、このようなくぐつを、彦吉は二、三十しかけておいて、翌朝早く、見廻りにゆくのである。たいがいこのくぐつに、鳩、鶇、ひよどりなどがかかっている、それらの鳥は、みな、枝の上にとまった瞬間はじきしめられたために、どれも、うつ伏せに羽をひろげて、首をたれ、しめ木ととまり木のあいだで、扁平になってこと切れていた。寒い冬しごとなので、死んでから時間のたったものは、固く凍っていたし、つい今し方かったのは、つかんでみると、腹がまだ温かった。彦吉は、これらを所持してきた袋へ入れる。袋は、木綿の布をつぎあわせてつくってある。米なら四、五升は入る筒状の、口は紐で絞る式に閉じられる。これに獲物を、ざっと二、三十匹入れて帰るころに、日が暮れた。もっとも、くぐつは、また、新規な餌をたらして、しなう木を張り、しかけなおしておく。田のあぜや、ごろくのまぎにしかけた藁製の携帯用にも、土鳩や、鶇や、きじがかかっている。これも、同じような恰好で死んでいる。つまり、飢えた鳥どもは、雪の中の朱い餌にまどわされて、夢中とまり枝にとまって、首をのばして、嘴をつかうかわないうちに、ぱしりとしめ木が天上から落ちて死ぬのである。

「畜生のおろかさでござりまして、鳥どもは、いくら友だちが、そのような目におうて死んでおりますのを見ましても、考えはなきものとみえまして、また翌日は、おのれがそのしかけにか

かつてこと切れるのでござりました」

と彦吉は、その様子を語っている。つづいて、はごというのは、夏のうちから、もちの木の皮をむいて、これを袋に入れて川水につけておき、皮がはなはだしくふやけてきて、ぬるぬるした汁を出すころにひきあげ、これを石の上で、薬打ち用の槌でたたき、餅状にし、出来上ったものを壺か瓶に入れて保存しておいたものをつかう。すなわち、とりもちといわれている。彦吉は、このとりもちを、薬しべにつける。薬はよく観察すると、もう一本の固い芯をもっていて、よく、年寄りが、煙管をそうじする時などに、紙よりがわりに使うものだ。この固しべに、とりもちをまぶしたものはごとよぶ。はごは鳥のむらがるはぜの木、南天の木などにしかける。山に実がなくなると、鳥は里へおりて実にむらがる。木に、とりもちつけた薬しべがわたされてあることは知らない。一本のしべに羽をとりつかれると、数分後に、鳥は団子状に丸くなって地めん落ちる。つまり、鳥は、羽ばたけば羽ばたくほど、とりもちのついた一本のしべで、軀をくくりつけることになる。彦吉はその鳥を拾うわけであるが、鳥たちは、よちよち歩きで逃げる。しかし、いくら逃げても飛びたてないから、すぐつかまえられる。この場合は、鳥は生きているので、袋に入れると、鶴も、ひよどりも、鳩も、それぞれの声をあげて啼く。しかも、その袋は、鳥のぬくみで懐炉ほど温かかった。

「生木にしかけるのは一どきりでござりまして、賢い鳥は、二どとはごをとりつけたる木にはまゐりませなんだ。鳥によって、ぼこい（阿呆な）ヤツと賢いのがおるものでござります。うそ、